

敗北逆アナルEND2 勇者様は敗北しました。

清楚清廉だった彼女はふたなりサキユバスに堕ちて…

プロローグ

「勇者様！ いよいよ明日は魔王との決戦ですね」

「……女魔法使いさん達はもうお休みになられたようです……ふふふ、こうして一人で焚き火を囲んでいると旅を始めた頃を思い出しますね」

「……そうでした。初めて魔物と戦ったのは森でオークに襲われていた女の子を助けたとき、でしたね」

「まだ、勇者としての力が目覚めて間もないのに3m近くもあるオークに立ち向かって勝利した勇者様は、とても、かっこよかったですよ」

「……はい、でも、そうですね……私の白魔法が勇者様のお力になれば。本当は女戦士さんと一緒に、勇者様のお側で戦いたいんですが……大丈夫です。私には女神様から頂いた加護がありますので、どんな傷も、呪いでも私が癒やしてみせます！」

シーシー ふたなりチンポに染まる彼女

「……ああ、勇者様」

「お気づきになりましたか？ はい、私は無事です」

「ここは、魔王城の地下牢です……はい。勇者様は敗北してしまいました」

「どうやら、他の皆さんも捕らえられてしまっているようです」

「私も勇者様とは別のところに捕らえられて……ああ、でも大丈夫です。洗脳などはされていません」

「私には女神様から頂いている加護がありますので、呪いやそういうものにも強いんですよ」

「逆にビックリといますか……傷の手当をされたり、乱暴な扱いは受けていないですよ」

「たぶん他の皆様も同じような状態だと思われれます」

「魔物たちが何を考えているかは分かりません。……ですが、私が動いているのは事実ですので」

「……ふむ、なるほど。さすがに勇者様は警戒しているみたいですね」

「お気づきではないかもしれませんが、今、勇者様には弱体化の呪いが掛けられています」

「まずは私がこの呪いを解きましょう」

「んっ、私の、白魔法で……え、何をしているって？ どうかしましたか？」

「こんなの、いつもやってるじゃないですか？ ひどく驚いているように見えますが……」

「魔法を使うときは、こうやって……んっ」

「おチンポ様をさらけ出さないと、白いのをびゅっびゅって、出せないじゃないですか？ 大丈夫です、私は洗脳などごとかれてませんよ」

「……ああ、なるほど。勇者様にも忘却の魔法が掛けられているのです」

「旅の間、何度も、何度も……私の白魔法でお助けしたことを忘れてしまっているだけです」

「大丈夫、安心してください。私のおチンポ様の白魔法で、んっ、すぐに治して差し上げますから……」

「んっ、ああ、ふっ……なんだか少し、恥ずかしいですね」

「……あれ？ 何度も、白魔法を掛けたことがあるのに、おかしいですね」

「白魔法を使うときに、恥ずかしいなんて、あ、今までに一度も思ったことがないのに、んっ、んっ、不思議ですね」

「でも……私のおチンポ様はいつもより喜んでるみたいですよ、ああ、ああ、はあ……んっ」

「すぐに、どびゅどびゅっ、って白魔法で解除、してあげますから」

「んっ、んっ、ああ、んっ、勇者様は、少しだけ待っててくださいね、んっ、んっ、んっ、

「私が、すぐに……んっ、ああ、はあ、はあ、二元に、戻して、あげますから、んっ、んっ、



「それはもちろん、おチンポ様を勇者様の奥まで挿入して、体の中から白魔法を発動させるので  
す」

「体の表面に浴びるよりも効果は絶大ですからね♡では、早速……♡」

「ああ、なんて可愛いおしりなんでしょう……♡はっ、ダメ、ダメ……これは神聖な行為なんで  
すから」

「はあ、はあ、はあ……ごくり♡早く、勇者様の呪いを解かないと、ですからね……♡」

「大丈夫です♡安心してくださいね♡勇者様を治すため、ですから♡んっ、くっっ♡」

「あっ♡あっ♡はあっ、んんっ♡すっくっ♡キツイ♡ですわえ♡んんっー♡」

「私のおチンポ様を、ぎゅうぎゅうっ♡締め付けてますよお♡んんっ♡はあっ、はあっ、はあっ  
♡」

「勇者様のアナル♡入り口のところ、すっくっキツキツなのに……♡んっ♡奥はトロトロで、熱  
くっ♡」

「おチンポ様をどんどん、飲み込んでいってます♡うっっ♡本当に、キツイ……くっっ♡」

「はあっ、はあっ、はあっ、んっ♡ちゃんと、根本まで入れてから、んっ♡奥の方で♡出してあげま  
すからね♡」

「安心してください♡勇者様♡あっ♡これは、神聖な♡行為で♡んっ♡はあはあ

「強力な♡白魔法♡ですからあ♡んんっ♡あっ、うっ♡ああ、すっすい♡全部、入っ  
ちゃいましたあ♡」

「感謝を♡おチンポ様に心からの信仰を捧げます……んっ♡はあ、はあ、はあ……ふっ……♡」

「でも、おかしいんですよ……何度も白魔法を掛けてきたのに、勇者様のこんな反応は、一度も  
見たことがありません」

「強力な白魔法のせいでしょうか？うっ♡んんっ♡はあ、はあ、はあ、んんっ♡」

「勇者様のアナル♡気持ちいいですよ♡んっっ♡キュウキュウっ……私のおチンポ様を離  
れたいです♡」

「んっっ♡ああっ♡もっど、動いて♡早く、射精してあげないと♡んっ、んんっ♡」

「うっっ♡ああ♡おチンポ様が♡すっくっ喜んでますよお♡んあ♡あっ、あっ、んんっ  
♡」

「先程の、私の手でシタときは、んっ♡比喩物にならないくらい刺激が♡すっくっですっ♡  
んんんっー♡」

「勇者様のケツまん♡すっくっ♡ああ♡ほらっ♡そんなに、動かないでっ♡」

「呪いのせいで全然、貧弱なままなんですから♡うっっ♡おチンポ様に感謝しながら♡奥で  
射精されるのを待っててください♡」

「はあ、はあ、はあ、んんっ♡私が、っっっ♡注いであげますから♡んっ♡」

「びゅっびゅっ♡おちんぼ様の祝福を中出し♡してあげますからねえ♡んんっ♡あっ、あ  
っ♡」



「んおっ♡ 私のおチンポ様もっ♡ またっ♡ 射精しそうですっ♡ んっ♡ ああ♡ 精子♡ 上がっ♡」

「んんっ♡ またっ♡ 出ますっ♡ こんな気持ちいいのっ♡ 我慢できないっ♡ 我慢しないでいいですよ♡ だってこれは必要な行為なんですから♡ 勇者様の呪いも洗脳も全部解いて差し上げますっ♡」

「っ♡ 出っ♡ 出っ♡ 出っ♡ んんっ♡」

「っ♡ 勇者様♡ あっ♡ 勇者様っ♡ すっ♡ 勇者様の射精っ♡ 可愛いっ♡」  
「んんっ♡ おチンポ様っ♡ 中出したらっ♡ いっぱい気持ちよくなってっ♡ びゅっびゅっ♡ 出ちゃったんですねっ♡」

「っ♡ こんなに気持ちいいのっ♡ 止められるワケ、ないですよっ♡ んんっ♡」  
「はあはあ、はあはあ、あっ♡ 腰っ♡ 止まんないですよっ♡ またっ♡ 出してあげますっ♡」

「おほっ♡ 全部っ♡ 勇者様の中っ♡ 精子っ♡ 出しますからっ♡ あっ♡ んんっ♡ はあはあ、んんっ♡ あっ♡」

「勇者様のっ♡ 可愛い喘ぎ声っ♡ もっ♡ 聞かせてっ♡ んんっ♡ もっ♡ ケツまんこ、絞っ♡」

「んんっ♡ すっ♡ おチンポ様っ♡ すっ♡ 元気なままですっ♡ これなら、何回でもっ♡」

「射精できますっ♡ 勇者様も、嬉しっ♡」

「あっ♡ ケツまんこっ♡ 気持ちいいっ♡ 勇者様の穴っ♡ 素敵っ♡ すっ♡ ホント、気持ちっ♡」

「っ♡ 気持ちいいのっ♡ 止まらなっ♡」  
「またっ♡ またあっ♡ 精子っ♡ 上がっ♡ おっ♡ おっ♡」

「勇者様のケツまんこっ♡ 中出したっ♡ 中々、膨れ上がったおチンポ様っ♡ 精子っ♡ 奥に突き刺っ♡ 奥に突き刺っ♡ 精子っ♡ 出しますっ♡」

「んんっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ イっ♡ イっ♡ イっ♡」

「んんっ♡」

「っ♡ 私、分かっちゃいました♡ ……ええ、ええ、すべては、おチンポ様のために♡ 動くっ♡」

「勇者様♡ 満足いただいたみたいっ♡ よかったですっ♡」

「おチンポ様の祝福は、♡ こんなに♡」

「素敵♡」